

台風 15 号による長期停電に関するレポート

台風 15 号による千葉県の大規模かつ長期にわたる停電。国民生活の生命線である電力供給が長期にわたり途絶えたのはなぜか。生団連事務局で、自らの調査結果も含め情報を整理してみました。

(1) 電気設備の損傷・倒壊

- ①配電線の損傷…倒木、飛来物（TV アンテナ、トタン屋根等）などで想定以上に配電線が損傷。
- ②電柱・鉄塔の倒壊…電柱約 2,000 本、君津市の鉄塔 2 基が倒壊。
 - i) 経済産業省の電気設備技術基準で秒速 40m の風に耐えられるよう設計。
観測では君津市は約 34m だったが、設計を上回る風力が局地的に吹いた可能性あり。
 - ii) 君津市の鉄塔は 1972 年完成したもので、東京電力管内の鉄塔の平均使用年数は 42 年。
設備の老朽化も倒壊原因の可能性もある。既存設備の更新は現在のペースだと 250 年かかる計算。

～無電柱化（電柱の地中化）について～

自然災害による被害を防ぐ有効策の一つ。電柱を地中に埋設し、道路の防災性能を向上させる。

しかし電線が走る区間最大 240 万 km のうち、現時点の無電柱化は約 9,900km と**全体の 1%未満**にとどまる。無電柱化の課題は以下の 2 点。

- ①**コストの高さ**…道路 1km あたり **5 億 3 千万円**（ガス管等と一緒に埋める共同溝方式）を要し、電柱設置の 3 千万円に対して約 17 倍のコストがかかる。
- ②**工期の長さ** …住民・資産保有者等の合意形成の難しさ、既存埋設物の移設など技術的な問題、強い規制など、**通常 6～7 年かかる**と言われる。

(2) 倒木による道路の寸断で復旧作業が遅延

山林の未管理が原因で倒木が各地で発生し、復旧作業に向かう車両の進入が阻まれた。多くのスギが幹の途中から折れており、原因はスギ特有の「溝腐病」。林業の衰退により、間伐など適切な管理が行われていなかった。さらに「電力設備に寄り掛かるなどした樹木の伐採は電力会社が行う」などの取り決めが撤去を遅らせた。

※中部電力は自治体と協力し倒木の恐れのある木を事前に伐採。和歌山県は早期復旧の妨げになる倒木や土砂の撤去など必要な支援を関西電力と相互で行う協定を締結するなど、事前対策を打っている事例もあり。

(3) 行政の対応の遅れ

千葉県をはじめとした各市町村の対応が遅れたことにより、停電が長期化してしまった。

- ①**通信の寸断**…電話の基地局が停電したこともあり、携帯電話を含めた通信手段が途絶えた。行政はどこでどれだけの被害が発生しているのか把握することができなかつたことに加え、報告することもできなかつた。
- ②**県の体制** … 県は台風上陸翌日の 10 日に災害対策本部を設置。また、現地確認のため職員を派遣したのは 12 日。災害時のマニュアルでは原則市町村から県へ被害報告することになっているが、上述の通り市町村は混乱の中、県は受け身。結果、千葉県全体の正確な状況把握も遅れ、**県から自衛隊への災害派遣要請は当初断水地域への給水支援にとどまり、県が災害用に備蓄していた自家発電機 468 台は 46%にあたる 216 台しか活用されなかつた。**

生団連では、「災害情報ネットワーク」と「生団連サプライ」の構築に加え、災害における被害の原因について分析を行い、対策について議論を重ねてまいります。